

〔日本紀略平城〕大同三年三月甲辰黃雨。庚戌黃雨。

〔源氏物語藤裏葉三十三〕こゝろあはたゞしきあまかせにみなちりぐにきほひかへり給ぬ。

〔枕草子七〕つれづれなるもの 雨うちふりたるは、ましてつれづれなり。

〔殿曆〕永久五年五月廿八日乙卯、今月雨不降、五月不雨降不可思議事歟、天災有之。

〔古事談王道后宮〕白川院金泥一切經、於法勝寺可被供養、臨期依甚雨延引三箇度也、被遂供養日、猶

降雨、因之有逆鱗、雨ヲ物ニ請入テ、被遣獄舍云々。○又見源平盛衰記

〔夫木和歌抄十九〕六帖題

こちふけば雨けにつどふ浮雲のかきあつめてぞ物はかなしき

爲家卿

〔古今和歌六帖天〕あめ

こぬ人を雨のあしとは思はねどほどふることはくるしかりけり

〔枕草子九〕風は略中 八九月ばかりに、雨にまじりてふきたる風いとあはれ也、雨のあしよこざ

まにさはがしう吹たるに略下

〔世事百談〕雨手風手 雲海 風はよく物を動かすこと、手あるがごとく、雨は一むらふり過ぐる

こと、足あるが如しとて、風の手、雨の足といふことあり、雨の足は唐山にても、ふるく雨足とも、雨

脚ともいへり、晉の長景陽が雜詩に、雲根臨八極、雨足灑四溟、又云、翳々結繁雲、森々散雨足、と文選

に見ゆ、蘇東坡の詩に、疎々雨脚長などいへり、和歌にも平兼盛集に、

君をおもふかすにしとらばをやみなくふりしく雨のあしはものかは、蜻蛉日記に、けふは廿

四日、雨のあしいとのどかにてあはれなり。

ふる雨のあしともおつるなみだ哉こまかに物をおもひくだけばなど見えたり。

〔催馬樂〕東屋